
人間になりたい

ルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間になりたい

【Nコード】

N1296B

【作者名】

ルク

【あらすじ】

私は、自分を人間だと信じて生きてきた。魔物や妖怪を忌み嫌っていた。だが、成長するにつれて人とは違う所が…。そして、18歳の誕生日に、事件は起こった…………。

全ての始まり

この世界は、三つの大きな大陸からなっていた。

1番大きな大陸には人間が、次に大きな大陸には魔物が、1番小さな大陸には妖怪が住んでいた。

人間の大陸と妖怪の大陸は近く、人間の大陸と魔物の大陸もまた近い。そのため、魔物も妖怪も人間の大陸を占領しようとし、人間はその猛攻撃に対抗し、そして魔物と妖怪は一つの大陸を取り合う敵となった。そんな中、第一次世界対戦が勃発した。そしてこの対戦中、信じられない事が起きた…。

一人の魔物（誇り高き龍族）と一人の妖怪（不思議な力を持つ者）が、何と、愛し合ってしまったのです。

二人は対戦中人間の大陸で幾度も会い、ついに子供（女）まで産んでしまった。その子供は何故か姿は人間そのものであった。二人は、敵と愛し合ってできた子供は、自分の国では歓迎されないと考え、人間の国に置いていく事を決めた。

そして対戦は終了し、知性と力のある魔物の国が勝利し、世界の中で心となった。

二人は子供を”ルク”と名付け、教会に置いていった…。

事件発生

ある日の夕方、一人の少女が教会に駆け込んだ。

「シスター（＾Ｏ＾）」

「どうしました、ルク？」

その子の名はルク。黒く長いストレートの髪をポニーテールにしている。背は162センチで、スタイルもいい。

「今日何の日か知ってますか？（。。）」

「はい。貴女の18歳の誕生日ですね。おめでとunggざいます（＾－＾）。」

「有難unggざいます（＜|＞）。教会でお祝いしてくれますか？？」
「いいですよ。では、今から儀式をしましょうか」

ルクは、赤ん坊の時に教会に捨てられ、12歳まで教会で過ごしました。他の人に引き取られてからも、毎日遊びに来ています。誕生日には毎回教会で祝ってもらっているのです。今日も、いつも通り学校帰りに教会へまっしぐら。ルクの親も、後から合流する予定です。

儀式が終わり、夕食の時間…。教会だから当然肉類は出ないが、ルクはこの味が大好き。

「はぁぁ…幸せ（＃＾．＾＃）！これよ、この味！！」

と、懐かしみながら次々と食べ物をお口に放り込む。すると友達が二人やって来て、

「ルク、18歳おめでとう（＾－＾）」

「有難うカジカ（ノ＞＜）ノ」

カジカは同じ孤児仲間、この教会の見習いシスター。ルクと同年の、可愛い女の子。

「歳が変わっても行動は変わってないな。いつになったらその暴飲暴食はおさま……っ!？」

「うるっさいわよカルロス!!」

カルロスはカジカの双子の兄で、皆孤児仲間です。どちらかという
と格好いいかな。

「…ってえなあ。足踏む事ねえだろっ」

「アンタが変な事言うからよ。」

「二人共、静かにしようよ(^ - ^)」

というやり取りをしつつ、カジカもカルロスも席に着く。

するとシスターが、マイクで全員に話をしました。

「今日はルクさんの18歳の誕生日です。ルクさん、誕生日おめで
とうございます!」

「有難うございます(<|>)」

ルクは、立ってお辞儀をして、座った。

「18歳という歳は、成人に……」

「また始まった…。」

毎年、シスターは祝いの言葉を言うと、その歳にまつわる話を長々
とするのです。真面目なシスター数人以外は、いつも無視して食べ
始めます。

「ルク、誕生日おめでとう」

「プレゼントは家で渡しませうね」

ルクの親代わりのキーラとタクティスも、笑顔でお祝いしました。

「有難うございます、お父様、お母様」

と、微笑ましく話ながら、突然…事件は起こりました。

「……?」

身体に感じる、微妙な違和感…。ルクは段々気持ち悪くなってきた。

「…ちよっとお手洗いに行ってきます」

「大か」

カルロスの言った事は無視し、急いでトイレに駆け込む。

「…はっ…はっ…う…あ…」

今までに感じた事のない違和感と、気分の悪さに、何回か食べ物を
もどしてしまう。そして、

「……？」

急に楽になったかと思うと、身体が微妙に光り出し……

「……っ！……？……ああああっ！！！」

凄い勢いで床に叩きつけられたのです。

「……？……？……？」

動けない。何が起こったのだろうか……？そう思い、辛うじて動かせる首を動かして……

「……っ！！……？……いやあああああっ！！！！！」

見てしまったのです。気の強いルクが、思わず叫ばずにはいられないモノを。

「……！……？……なっ……何っ！……何何何！……？」

信じられない。自分の背中に……。

とてつもなく大きな、翼が生えていたのです。

シスターと両親

「……!?……!?」

何故自分に翼が生えているのか、想像も出来ない。ただ、あまりに翼が大き過ぎるため、トイレという狭い空間では身動きがとれない。恐らく翼が何故か急に生え、翼に押されて床に叩きつけられたのでしよう。

「どうしました!？」

「大丈夫、ルク!？」

シスターやカジ力達が、ルクの悲鳴を聞いて駆け込んで来た。

「……なっ……何でもないですっ!」

シスターやカジ力達に、こんな姿は見せられない。

「どうしたの、ルク?? 本当に大丈夫??」

「大丈夫!! ちょっとウォッシュレットの水圧が強かったただけだから!! 後でそっち行くから、カジ力達は先に行つて!」

「……分かった。」

意味不明な言い訳をし、カジ力達を追いやる。

「ルクさん?」

「しっ……シスターも先に行つて下さいっ」

「……翼が、生えたのですか??」

「……!?……えっ!？」

何で? 何で分かったのだろうか??

「そうなんですね??」

「……シスター、何かご存知なんですか!？」

「とりあえず、そこから出ましょう。大丈夫です、私以外居ませんから、出てきて下さい。鍵を開けられますか??」

言われ、手を延ばす。…が、届かない。何とか翼を動かして開けるしかない。ちょうど、翼の先に付いている鋭い爪が、鍵の辺りに近い。

「……もう……ちょい……」

自分でもどう操作しているのか分からないが、思う通りに動く。

カチャ………ギイイイ…

ドアが開いた。

「……あらあら」

「……シスター……」

半泣き状態で立ち上がり、シスターに抱き着く。

「……わっ……私っ……何なんですかっ……」

怖くて、声も震えてしまう。

「落ち着いて下さい」

「落ち着けませんっ！」

「……説明しますよ。ですが、ここではいつ誰が来るか分かりません。奥の部屋に移動しましょうね。」

「……はいっ……」

シスターが、廊下の様子を見はからう。

「……いいですよ」

そして、急いで奥の部屋へと行き、鍵をしめた。「っ……うっ……

ひっ……く……」

ここまでできたら泣かずにはいられない

「大丈夫ですか??」

「教えて……下さい……っ……私っ……人間じゃないんですかっ……?」

「……そうです」

「……っ!??」

ついに、泣き崩れた。

「うああああっ!………あああああっ!!!」

「……貴方が、ここに来た時の話をします。」

「うっ………ひっ………ぐすっ」

ルクは何とか泣き叫ぶのを抑え、シスターの話を聞く。

「あれは…ちょうど第一次世界対戦中で…私がまだ見習いシスターだった時の事です。いつもの様に外を掃除をしていましたら、空から二人の人が、子供を抱えて降りてきたのです……」

人が空を飛ぶはずかない…すぐに、私はその二人が魔物か妖怪であると判断しました。

「人間よ…話がある」

教会では、来るものは決して拒まないよう教育されていたため、戸惑いながらも答えました。

「…どうぞ」

「私はサラ。魔物であり、誇り高き龍族だ。そして、この子の母でもある。」

子を抱えている、黒髪の女性はそう言いました。

「私はクラン。妖怪で、その子の父だ。あまり人に聞かれたくない事なので、時をしばらく止めさせていただく。」

と言うと、クランと名乗った男性は、どこから杖を出して、

「フリーズ・クロック！」

と叫びました。本当に時を止めたらしく、落ちかけていた木葉が空中で止まっていました。魔物と、妖怪が……この子の親…？

「……もしかして、貴方がたは……」

「恐らく、お前の考えは合っている。」

「やはり…」

敵同士である妖怪と魔物が、戦いの最中に出会い、愛し合ってしまったのでしょうか。これは、許されない恋……

「どうして貴方がたは、人の姿なのですか？？」

「我ら程の力の持ち主ともなれば、人に化ける事は造作もない」

「はあ……」

「……この子を、人として育ててやってほしい。」

私は、少し戸惑いながらも、答えました。

「……分かりました」

「名は、ルクと言う。女の子だ」

と言って、サラは私に子を渡したのです。そして、言いました…

「この子が１８の歳を迎えたとき、恐らく、龍族の力が芽生え、翼が生えるであろう」

「その翼は、幼き龍には隠す事は出来ない。だが、私の力…人間には”魔法”と言われている力も受け継いでいるはずだ。それを上手く使えば、翼を見えなくする事は可能だ」

『頼んだぞ、人間…』

「…と言う感じです」

いつの間にか涙は止まり、シスターの話に聞きいつていた。

「……………」

「…大丈夫ですか??」

あまりに壮大な話で、ちよつと頭がついていかない。

「……………え?」

「ルクさん??大丈夫ですか??」

「……………あ、はい。」

整理しよう。つまり……

「……………私の、両親は……………」

魔物と……………妖怪……………

決意

「この事は、私以外知らない事です。」

「そうですか…」

少しだけ、落ち着いてきた。

「私の両親……どんな人でした?？」

この質問は、昔からよく聞いていたのですが、その都度シスターには上手くかわされていた。だが、もうかわされはしないだろう。

「…綺麗な人でしたよ。」

「身長は?髪型は?」

「身長は…サラさんは私より少し高かった気がしますが……18年前なので、あまり覚えていません。それに、人に化けている姿ですので……常にその姿かどうか分かりませんよ?」

「…分かりました」

ルクはもう泣いてはいなかった。しっかりと立ち、翼の観察をしている。

「……強いですね」

「強くなんかないですよ。でも、いつまでも泣いている訳にいきませんしね。」

観察していくうちに、翼は生えているのに、背中の洋服が全く破けていない事に気がついた。

「……?」

何故だろう??まあ、有り難い事だが……。

「妖怪は、物を通り抜ける力を持っています。きっとソレを無意識に使っているのではないのでしょうか?」

「成る程。……シスター、ちょっと聞いてもいいですか??」

「私に答えられる事なら、答えますよ(^ - ^)」

「どうやって翼、見えなくするんです??」

「妖怪であるお父様のお力を使うのですよ。…それ以上は分かりま

せん……御免なさいね。」

「そうですか……」

つまり、自分で考える……という事が……。

分かる訳がない……

「……どうすれば……」

「お父様は、杖を出して魔法を使つてらしたのですが……もしかしたら、ルクさんも何か物を出さなければ力を使えないのではないのでしょうか……?」

「物……ですか……?」

とは言つても、物の出し方が分からない。

「……!……ルクさん、ソレは……」

と言われ、シスターの視線の先を見ると……

「……!」

ルクがいつもつけている十字架のネックレスが、微弱な光りを放っている。もしかしたら……!

「お父様……力を貸して下さいっ」

願いながら、十字架を握ると、さらに光りが増した。目を閉じ、翼が見えなくなるよう祈る。

「……ルクさん、もう大丈夫ですよ」

と言われ、見ると……

「……いやったああ……!!」

翼は見えない。成功した様だ。

ガタン……

遠くで物音がし、驚いてふりかえると、机が倒れていた。

「……見えなくなっても翼は存在するみたいですね。気をつけて下さいね」

どうやら翼で倒してしまった様だ。

「はい……。」

この翼……かなり大きい。しかも所々に鋭利な爪がついている。これから扱いが大変だ…。

「これから、どうしますか??」

これから……

「……ちよつと、じっくり考えてみます……」

まだ頭がごちゃごちゃで、考えられない。色々と整理してみなければ……。

「今日は、もう帰ります……」

その夜……

「（私が……魔物や妖怪の子? 何で私が魔物の子なのよ。あんな独裁者たちの……）」

ルクは、魔物を忌み嫌っていた。この世を、我が物顔で取り仕切り、人間から多額の税を巻き上げ、裕福な生活をしている奴らだからだ。

「（でも……）」

自分は、好きでこんな体に産まれた訳ではない。母も、魔物であるからと言って、嫌ってはいけない。

「（お母さん……お父さん……）」

今まで全く分からなかった両親の事……。自分が捨てられた理由……。少しずつ分かってきた…。

「どんな人達なんだろう……?」

もつと知りたい。

「……よし!」

旅に出よう。両親を探す旅に……!

旅立ち

翌日、学校にて……

「（良かったあ、1番後ろで……）」

朝からずっとこの大きな翼に悩まされていた。後ろに席が無いのが唯一の救いだ……。でも、かなり不便だ……。どうにか出来ないものか……？

「……………あああああ！！！」

思いついたあつー！！

先生やら生徒やらがこちらを見る。

「あ、スイマセンでした」

ルクは立ち上がり、頭を下げて座った。

「（そうよ！！妖怪には物を通り抜ける力があるってシスター言ってたじゃない！！）」

ようはソレで、翼を何でも通り抜ける様にすればいいのだ。そうすればもう人にぶつかったりはしないだろう。ただ……

「（どうやればいいんだろう……f^_^j）」

魔法だろうか？それとも…思うだけでいいのだろうか？とにかく、ネックレスを掴み、祈ってみる。

「……………どうしたの、ルク？」

「…え？あ、いや、何でもないよ、カジカ。」

ルクの変な行動を不信に思ったカジカが声をかけてきた（カジカはルクの前の席）。

「こいつが変なのはもとから…ったあつー！………??？」

こう言ったのはカルロス。ルクの隣の席にいる。ムカついたので翼で殴ってみた。やはりコレは魔法では通り抜けられない様だ。

「何だあ??？」

「天罰よ。………そうだ、二人とも………お昼屋上で食べない??？」

「いいよ」

「別にいいけど…何で？」
「話したい事があつてさ」

お昼……緊急事態が発生した。

「何やってんだ、ルク？」

「いや、ちよつとね……」

先に屋上に行っていたカジカとカルロスがルクを見る。ルクは……
屋上へ行く扉に翼がつかえて、苦戦していた。

「（どうすればいいのよおおおっ！！！！）」

「大丈夫？ルク？」

「だ、大丈夫っ！！（……あぁっもっっ！！お願いだから翼っ！！
通り抜けてっ！！）」

と思った瞬間、いきなり通り抜けた。

「……うわあっ！！」

勢いの余り、転んでしまった。

「……大丈夫か、お前……」

「ルクっ！今日、どうしたの？何か変だよ？？」

「……大丈夫、有難う。」

体制を立て直す。

「大丈夫？怪我してない??」

「大丈夫、有難うカジカ（^-^）」

どうやら、通り抜けてほしいと思った時だけ、通り抜けられる様だ。
では洋服はどうなっているのだろうか……？

「（分からない事ばかり……）」

ふて腐れながら、二人と一緒に弁当をほおぼる。

「……話つてのは何だ？」

「あ……うん、えつとね……」

二人とも、真顔でルクを見つめる。ルクは……昨日、この二人には

自分が人間ではない事を言うべきかどうか、かなり悩んだ。

「（……やっぱり、言えない……）」

今二人は、ルクが人間だと思っているから仲良くしているのかも知れない。ルクが、魔物と妖怪の子であると知ったら、嫌われてしまいかも知れない。まだこの二人とは仲良くやっていきたい……だから、まだ言えない……。

「……私、両親を探す旅に出ようと思うの。」

こちらの話だけは言わなくてはならない。二人とも、案の定目が点になった。

「勿論学長に許しを得てからだけど。」

「……両親は？」

「え？」

「今の両親だよ。あと、シスター。ちゃんと話したのか？いいって言ったのか？」

「まだ言っていない。シスターは分かってくれるし、お父さんとお母さんには今晚言うつもり。」

「そう……か……」

カルロスは、考えこんでしまった。カジ力は凄く心配そうな顔をしている。

「……教会の聖域を出る事になるの？」

聖域を出れば、魔物の支配下だ。どんな危険が待ち受けているか分からない。

「……うん」

聖域を出なければ、探せないだろう。

「武器とか、持っていった方がいいわ。何が起こるか分からないもの……。」

「カジ力は、旅に出る事は賛成なの？」

するとカジ力も、黙り込んでしまった。

「……俺は、反対だ。」

カルロスは言った。

「親を探したいって思う気持ちは分かる。けど、危険すぎる。金も必要だし、武器も必要だろう？それに、何か手掛かりはあるのか？」

「……名前は、分かったよ。サラと克蘭。」

「容姿は？二人は今何やってんだ？？」

「……分かんない」

カルロスは、ため息をついた。

「呆れた。話になんねえよ。」

「でも、もう決めた事なの。私は旅に出る。」

「……考えは、変えられないの？」

カジカも、言う。

「凄く心配よ。聖域内ならまだしも、外では何があるか……」

「……御免ね、カジカ……」

二人とも再び黙り込んでしまった。

キンコーンカーンコーン……

予鈴が鳴った。

「教室、戻ろうか。」

そう言い、弁当を片付けて立ち上がる。二人も、ルクにならって片付け始める。

「……いつ行くんだ？」

「今週中には行くよ。多分……明後日位かな。」

「そうか……」

その後、三人とも無言で教室へ戻った。それから今日一日、一言も話さなかった。

放課後……

ルクは、シスターの所に行った。

「……そうですか……。分かりました。私は、とめません。」
「有難うございます。」

礼を言つて、即家へ。

「お父さん！お母さん！！」

「どうしたの、騒々しい。お父さんは仕事です。」

お母さんが出てきた。ルクは、いきさつを話す。（自分の正体以外）

「……………反対です」

「（やつぱり……）」

「危険過ぎます。」

「でも、会いたいのに！！前からずっと会いたかったの……。」

お母さんは、背中を向け、晩御飯の仕度にかかる。

「お母さんを嫌いになった訳じゃないの。ただ……」

「……お父さんが帰って来てから話しましょう。」

それからしばらく、気まずい空気の中、父親が帰って来るのを待った。

ピンポン

インターホンが鳴ると、ルクはすぐさま玄関まで走り、出迎える。

「お帰りなさい、お父さん！！」

鞆を持ち、上着を脱がせる。

「ありがとう（ハ・ハ・ハ）。ただいま。」

続いてお母さんもパタパタと出迎えた。

「あなた、聞いてちょうだい。この子ったら……」

「ん？」

お父さんは、二人から事情を聞きながら手を洗い、テーブルに着いた。晩御飯は既に出来ており、ルク達も席に着く。誰からともなく

食べ始め、お母さんとルクはそれぞれの想いを語る。

「旅に出る事は絶対反対です。聖域内を探すだけならまだしも…」

「聖域の外に行かなきゃ会えないんだもの。聖域内にはいないって分かってるのよ。」

「ならダメです。危険よ」

「……ちよつといいか？」

お父さんが、口を挟む。

「ルク、どうして聖域内にはいないって分かってるんだ？」

「え？あ、それは…聖域内は探しつくしたからよ。」

まさか聖域に入れない魔物と妖怪だからだとは言えない…

「…ルク、私達はお前をひきとると決めた日、シスターから……話を聞いたんだ。」

沈黙が流れる

「……え？」

「全て、知った上でお前を育てる事にしたんだ。」ルクは、お母さんを見る。お母さんも、頷いた。

「……ええ??」

「私達は、ルクが魔物と妖怪の子である事を承知で、お前を引き取ったんだよ。」

お父さんが再度付け足した。

「……どうして…」

「ルクを、愛していたからだよ。魔物だろうが妖怪だろうが関係ない。ルクを、ウチの子にしたいって思ったからだよ。」

「………」

涙が溢れる。

「でも、私達は人間だ。人間の家に引き取られたからには、人の子として育てた。勿論色んな障害は出てきたけどな。」

「………う…」

涙が、とまらない。

「ルク。あなたは、私達にとってたった一人のかけがえのない娘な

の。聖域の外には、魔物の悪政に苦しめられて荒れた人や、凶暴な魔物もいるの。魔物を悪く言う気はないですけど……外は危険なよ。」

「私も、外に行くのは反対だ。外は荒れていると聞く。そんな所に大事な娘を行かせる訳にはいけない。」

しばらく沈黙が流れた。ルクも段々泣くのをやめ、再び考えた。

「……御免なさい……。」

それを聞いてお父さんはため息をついた。お母さんは泣きそうになる。

「それでも……会いたい。…会いたい……。」

再び沈黙が流れる。

「……考えは、変わらないのか。」

「……御免なさい。」

「……そうか……」

お母さんは、ついに泣き出してしまった。

「……お母さん……御免なさい……」

心苦しい。

「行くなら、ちゃんと準備してからだ。ルク、お前…翼は生えたんだな?」

「う…うん。誕生日に。」

「なら、他にも力が使えるはずだ。龍族の力は翼だけじゃないだろうからな。自分が使える大体の力は把握して行け。」

「はい。」

ルクは、大きく頷いた。

「……よし。母さんは私がなだめておくから、ルクはもう寝なさい。」

「はい……」

と言って立ち、お母さんを見る。目を合わせてくれない……。

「…お休みなさい。」

翌朝

早くに目をさましてしまったルクは、着替えを終えると、誰もいないだろうリビングへ行った。

「おはよう、ルク。早いわね。」

「お…お母さん…。何で…？」

意外にも、母がテーブルに料理を置いていた。

「何でって…眠れなかったのよ。」

「…御免なさい。」

ルクも、準備を手伝う。

「いつ行くの？」

「今日は学長に会って説得するから…明日にでも行くつもり。」

「使える力は分かったの？」

「ちよつとなら。物を通り抜ける力と、物を見えなくする力。翼で空も飛べるだろうし。それくらいかな。後は旅をしながら見つけるつもり。」

「…そう。」

母は、凄く心配そうな顔をする。

「…御免なさい。」

申し訳がない。今まで、こんなに愛してくれていたのに。どう言えば、分かってもらえるだろうか…？

「何かあったら、自分の姿を見えなくして、壁を通り抜けて、それでもダメなら飛んで逃げるんだな。」

後ろから、声がした。もちろん父だ。

「おはよう、お父さん。」

ルクは振り向いて挨拶する。

「おはよう。」

朝食の準備も終わり、テーブルに着く。

『いただきます。』

食べながら、ルクは母を見た。……目を合わせてくれない。父を見ると、呆れた様な顔で母を見つめていた。無言のままの食事となり、ルクは二人に申し訳ない気持ちを抱きつつ、逃げるように学校へ向かう。

「（御免なさい、お父さん、お母さん……。T□T。）」

小走り気味に向かったからかなり早くに学校に着いた。するとルクは、放課後に行く予定だった学長の所へ向かう事にした。

「（分かってくれるかな……）」

凄く不安だ。でも、両親に会いたい。その気持ちだけは譲れない。戸惑いながらも、学長室に着いた。大きな扉が、ルクをいつそう緊張させる。

ピンポン

「はい。」

インターホンを押すと、すぐに応答がきた。ルクは慌てて言う。

「学籍番号Rー12のルクです。学長と話をさせていただけますか？」

「……ちよつと待ってなさい。」

奥で話声がある。しばらくして、

「入きなさい。」

大きな扉が、ゆっくりと開く。

ギイイイ……

奥には大きな机があり、そこには70は過ぎてそうな御老人（学長）が一人腰掛けていた。その机の前には、学長の秘書であろう男がいる。ルクは、緊張しながらも中に入った。

「学長はお忙しいのです。10分で終わらせなさい。」

「…頑張ります。」

ルクがそう言うと、学長がいきなり、

「……黒川君、少し席を外してくれないかな。」

「…は？」

「二人だけで話したいんだ。すぐに終わらせるよ。」

「…分かりました。」

学長に言われ、黒川という秘書はすぐに出ていった。ルクは、呆気にとられている。

「……あ…あの…？」

「分かってますよ、全て…ね。」

「…！？」

驚くルクを、学長はニツコリと見つめる。一体、どこまで自分の事は知られているんだろうか？驚きと焦りを隠せない。

「聖域内で知っているのは、シスターと私と君の両親だけです。安心なさい。」

そういうと学長は、立ちあがってゆっくりとルクへ歩み寄り、ルクの頭を撫でた。

「そろそろ来る頃だと思ってました。」

「あの…じゃあ…。」

「行くのでしょうか？聖域の外へ。こうなると思って、君の両親の事を少し調べておきましたよ。」

と言いながら学長は机へ行き、ファイルを出してルクに渡した。それには、サラとクランの事についての資料が沢山入っていた。ルクは感動する。

「あ…有難うございますっ」

「私に出来るのはここまでです。…気をつけて行きなさい。」

「はいっ！！失礼しますっ！！」

深々とお辞儀をし、小走りで部屋を出た。

キーンコーンカーンコーン

予鈴だ。ルクは急いで教室へ行った。

ガラガラガラ……

「おっはよおっ」

「お、オハヨ……」

上機嫌で席まで行くと、まだカルロス達が来ていなかった。

「あれ？二人は??」

「まだ来てないみたい。」

結局、この日は二人とも学校を休んだ。ルクは、会える最後の日だったかもしれないので、淋しさとイラつきを感じた。

その夜……

「ルク、コレも持って行きなさい。」

父と荷造りをする。母は、まだ反対していた。大体準備も完了し、三人で話をする事に。

「……」

「……」

「……」

ルクと父は、まだ反対している母を見る。反応が返ってこない。

「……お前も、いいかげん認めたらどうだ。」

口を開いたのは父。

「……嫌です。」

「お母さん……」「もう決まった事なんだ。認めなさい。」

「……」

「お母さん、御免ね……」

「……」

沈黙が続く。

「……はあ……」

母はため息をつく、ルクを見、言う。

「行かせたくありません。ルク。それは私があなたを愛しているからなの。」

「…御免なさい。」

「…それでも、行くのね…。」

ルクは小さく頷く。

「……………気をつけなさいよ。」

「！？……………じゃあ…？」

「どうせ聞く耳持たないんだから。まったく……………」

「有難う、お母さんっ！！」

ルクは喜びのあまり母に抱き着いた。

「絶対、絶対帰ってくるからっ！！」

「…待ってますよ。」

「よかったな、ルク。」

こうして、心置きなく旅に出られるようになった。

翌朝…

出かける前最後の朝食を食べ終え、家を出る時……

「これを持って行きなさい。」

母に、指輪を渡された。

「これ……………」

「私達の、結婚指輪です。大切な、大切な物よ。絶対に返しなさいね。」

「お母さん……………」

「淋しくなったらそれ見て私達を思い出しなさい。」

「お父さん……………」

ルクは指輪をはめ、二人を見る。

「行つてらっしゃい。」

荷物を持ち、ドアを開け……

「…行つてきます。」

笑顔で、言った。二人も、笑顔で見送る。そしてゆっくりとドアを

閉め、感動に浸りながら向き直ると……

「遅えぞ、ルクー！」

「早く早く♪」

カジカとカルロスが、大きな荷物を持って門の前にいた。ルクは驚き、叫ぶ。

「何やってんの！！??」

門を開け、二人の姿をよく見ると……旅行に行くような恰好だ。

「俺達も行くんだよ。説得すんの大変だったんだぜ??」

「ルクー人じゃ頼りないからf^_^」

二人が学校を休んだのは、これが理由のよう。

「ちよちよちよ……ちよつと待ってよ!!」

ついて来られたら、二人に人間じゃない事がバレてしまう。しかも危険になったらあの逃げ方なんて出来ない。

「ダメ。ルクが行くなら、俺らも行く。俺らの親も外にいるみたいだしな。」

「そうだよ。一人より三人の方がいいよ。」

「それは確かにそうだけど……私には、一人で行かなきゃならない理由があるのよ!!」

「何だよ。せつかく俺が、お前を守ってやるって言ってるのに。」

「それは有り難いんだけど……ね……」

「ダメ。もう行く事にしたんだ!!」

「一緒に行ったらどうですか??」

後ろから声がした。見ると、シスターがいる。

「お見送りに来ました。ルクさん、私は……二人には本当の事を言ってもいいと思いますよ。」

「本当の、事……?」

「何だよソレ?」

皆、ルクを見る。ルクは、静かに首を横に振った。

「私達にも言えない事なの??」

「今は……まだ……」

「……それが、一人で行かなきゃならない理由ってヤツか??」

「……うん。」

「気になるな。言えよ。」

「……………」

「……ま、まあ……それは一緒に旅をしていたらおいおい分かりますよ。三人とも、しばらくの間聖域内を出るんですから、そうツンツンしないで下さい。」

と言われ、カルロスは諦めた。シスターの案内で聖域を出るためのたった一つしかない門へと向かうと……

「ルクーっ!!カルロス!!カジカーっ!!」

話を聞き付けたクラスメート達が、門の前に集まっていた。

「みんな……………」

「三人とも、絶対帰って来てよっ!!」

友達の言葉に、涙を流す。

「ありがとう、みんな……。絶対、帰ってくるから…………っ」

別れを惜しんでいる間に、シスターが門番に話をつけた。いよいよ、外界への門が開く。

ギィィィィ…………

「行つてらっしゃーい!!」

「帰ってこいよっ!!」

「みんな、ありがとうー!!」

「絶対帰ってくる!!サンキュー!!」

「元気でねーっ!!!!」

こうして、三人は未知なる世界へと旅立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1296b/>

人間になりたい

2010年10月17日05時36分発行